

6. 読み書きについての学校へのお願い

学校へのお願い

発達性読み書き障害（ディスレクシア：学習障害の一つ、知的な遅れは伴わない）では、話す、聞くという音声言語には大きな問題点がないにもかかわらず、読む、書くという文字言語に困難を抱えます。日常会話能力に問題がないにもかかわらず、国語のテストの得点が低い、算数の計算はできても文章題が苦手などの場合に、それが知的能力の低さによるものではなく、こうした特性による場合が多いことを理解していただければと思います。なお知能検査である WISC-IV では、読みに関連する問題が含まれているので、点数が（実際の能力よりも）低く出ることがよくあります。

*基本的には文字を音に変える（decoding の障害）と文字をまとまりとして読む（chunking の障害）ですが、日本語は文字種もひらがな、カタカナ、漢字を多いことから、文節が認識できない、助詞の読み間違いがあるなどの気づかれにくい場合もあります。

1. 基本的な症状

音を文字に変える障害は、たとえば「は」と「ほ」、「き」と「さ」を読み間違えるなどの場合です。この場合には①文字を見ないで音を出す、たとえば [sʌ]、②文字を見て音を出すという 2 段階の練習をしてみます。

文字をまとまりとして読む障害は「い」「ぬ」がそれぞれ読めたとしても声を出して読むときに「いぬ」をまとまりとして認識できないので、読んでから「いぬだ」と気づくことが多くなります。この場合も①文字を見ないで声を出してみる、②文字を見て声を出してみる練習になります。読むことが苦手な場合、繰り返す読むことだけをさせても上手にはなりません。学習嫌いになるだけです。

文節の間違いや助詞の間違いについては、やはり①文字を見ないで文章を読んで聞かせる、②理解できない単語などがあれば説明する、③理解した後で読ませることが基本です。

2. 漢字にはいろいろな読みがあります。その使い分けが難しいことが多いので、語句にあてはめて練習することをお勧めしています。たとえば「急

流が流れる」のようにですが、「左右」「東西南北」など同じカテゴリーの漢字の読み間違いもしばしば起きます。やはり語句を使いながら教えていただければと思います。

3. 音読が同じ学年のお子さんに比べて苦手なため、基本的にはクラス内での順番に当たる音読は避けていただきたいと思います。読めないことによって本人が傷つく可能性があり、どうしても必要と考えられるのであれば、前日に読む箇所を本人に教えていただきたいです（本人は覚えて話します）。あらかじめ家庭で意味を理解してから練習してもらうことで本人が傷つくことを防ぎたいと考えています。
4. 読みの苦手さがあれば、程度はさまざまですが書きの苦手さもあります。習った漢字をすぐに書くことは苦手であり、読みが十分にできるようになってから書く練習をすることが望まれます。トレーニングでまず読みの向上を図り、書き、特に漢字については読みを教えて、それが定着してからのほうが、うまく書けるようになることが多いです。自信のないまま書かせてもきれいに書けない、大きさがばらばらなどのことがあり、そこを注意しても自信を失い、書くことが嫌になります。
5. 読みの課題を抱えますので漢字の練習や計算問題を大量にこなすのは難しく、家庭学習においては量を減らしてください。「少しでも」の積み重ねです。特に国語においては、予習が大切ですので、翌日の学習の内容、単元の変更などは事前に知らせていただくことが望ましいと考えます。
6. デジタル機器の助けも借りながら、少しずつできるようになり自信がついてくれば、それが子どもたちの将来につながることを理解していただければ幸いです。デジタル教科書によるフォントや文字サイズの変更（UDフォントの使用などは、しばしば読みやすさにつながります）、場合によっては読み上げ機能を使う、板書は撮影するなどについてもご検討いただければ幸いです。子どもたちは読めるものなら読みたい、書けるものなら書きたいと考えていますが、できるようになるためには手順も必要です。よろしく願いいたします。 参考「読むトレGO！」合同出版（2019）

学校へのお願い（書字の困難さを抱える場合）

発達性読み書き障害（ディスレクシア：学習障害の一つ。知的な遅れは伴わない）に限らず、書字に困難を抱える子どもたちがいます。学校では読み、書き、算数（数学）がセットになっており、これらの習得を求められますが、書きの困難さを抱える子どもたちに対して、いくら書きを強制しても、いくら繰り返して書かせても、それで上達することはまずありません。現在の社会生活では、読みはともかく書きについてはキーボードやスマホなどで入力することが多く、実際に筆記具を手にとって書くという場面は学校外では驚くほど減っています。読み書きの困難さに対しては、大学共通試験においても配慮が行われるようになっており、その配慮は拡大してきております。欧米では試験における ICT 機器の使用や、別室受験で話して答えるなどの対応がなされており、その流れはわが国にも及んでいきます。

書字の困難さを抱える場合、読みにも困難さを抱えることが多いのですが、子どもたちは何とか読もうとして、読みについては「疲れるけれども読める」ようになっていても、書くことになると、字形が大小ばらばらであったり、画数の多い漢字、似たカテゴリーの漢字（東西南北や春夏秋冬、雪、雲、曇など）の間違いもしばしばみられたりします。

最近では GIGA スクール構想の中で子どもたちの ICT 機器の使用も一般的になりつつあります。書きの困難さを抱える子どもたちに対しては、極力 ICT の使用（キーボード入力や音声入力なども含む）をお願いしたいと考えています。実社会では手で文字を書くことは本当に少なくなっています。日本語は同音異義語が多いので、ICT での変換ミスを見破る必要はありますが、出力はできます。読みの苦手さがなく、書きの苦手さが強い子どもたちにも ICT の利用は効果的なことが多いです。

練習しても克服できない課題に繰り返し取り組むことは、本人の自己肯定感を下げるだけでなく、学習姿勢にも影響すると考えられます。なお発達性協調運動障害を抱えて姿勢保持ができないための困難の場合にはまた異なる対応が必要になります。